

# 親鸞仏教センター通信

2002.  
December

2002年12月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail tomo-k35@k6.dion.ne.jp

第4号

## 〈闇〉に浮かび上がるもの

親鸞仏教センター研究員 櫻井 智 浩

最近出版された仏教概説書のあとがき。「密教とオウム真理教を混同するような誤解・偏見は、もはやほとんど過去の遺物と化している」。この言葉には、当時、そのような誤解によって苦汁を舐めさせられた彼らの実感がこもっている。その実感は、程度の差はあれ、宗教に関わる者には頷けるものだと思う。しかし、オウム真理教を求めた人々が抱えていた苦悩というのは、決して過去の遺物ではない。それは形を変え、勢いを強めて現代の下層に伏流しているのだ。そのことを意識せずに仏教との違いを叫べば叫ぶほど、宗教と呼べないものに人々が引きつけられていった理由、その根本にある苦悩とは乖離<sup>かいり</sup>していつてしまう気がする。オウム真理教だから信じたのではない。仏教だから信じたのでもない。自分の苦悩に应运<sup>えんぎ</sup>してくれたから彼らは信じたのだ。たとえ、それが結果的に苦悩を深めることになったとしても。

「カルト問題」は、センターが取り組んでいる課題の一つである。そこに、現代人の〈闇〉が端的に先鋭的な形で今なお表れてきているからである。学びの中で、彼ら信者の問題は、苦悩という点では決して人ごとではないと再認識させられる。家族の問題、現状への不満、将来への不安。彼らの入信動機は、我々が日頃抱く悩みとさほど変わらないものばかりである。ただ彼らは、その奥底に自己の存在意義の揺らぎを認め、「明確な」形ある答えを切望した。明るみの希求、暗闇の忌避という人間の抜きがたい〈闇〉。その〈闇〉に肉薄するとき、それは自分自身への問いとなって突き返される。今こうしていられるのは、たまたまカルトに出会わなかったというだけのことでないのか。さらにいえば、本当に自分は教えに出会っているのか。

仏教に学ぶ自分を振り返る。たとえば、「因から果が生じる」という仏典の言葉を聞いたとき、それを両者の間で完結した因果関係のみで捉えがちである。しかし、そうではない。果が地に落ち、条件が揃えば、それは種子として新たに芽吹く。そうだった。確かな〈いのち〉の営みに裏打ちされた言葉なのだ。仏教は、そういう〈いのち〉に対する眼差<sup>まなざし</sup>しから確かに始まっている。現代は、その眼を回復不可能なほどに失った荒野である。そこに立ち、種子をまく。種子は芽吹くだろうか。〈闇〉に立ち、見据える。そこに我々自身の課題が浮かび上がるのだ。

## 親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

## 「浄土—濁世を超えて、濁世に立つ—」

## 人間を破る言葉

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



本多弘之所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、第8回と第9回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第8回では近代文明の罪業性をめぐって、第9回では現代の非宗教化と浄土の光をめぐって、それぞれセンター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者の方々との活発な意見交換がなされた。ここでは、先に行われた第6回の問題提起からその一部を紹介する。（越部良一）

## ■ 人間を破る言葉

仏教が教えようとする真理性、存在の本来性というものは、我々の妄念からは見えない。妄念からは見えないが、教えをとおして何かそこに「ある」ということが感じられる。その「ある」と感じられる世界から呼びかけてくるはたらき、そういう形で「本願」というものが教えられている。「願」が呼びかける。「願」が人間にはたらくと。

人間は、相対的な存在のありように悪戦苦闘し、それ故に苦悩を生み、上を見たり下を見たり比較の煩悩に苦しめられ、それぞれの存在がそれぞれに与えられている本当の尊さに気づけない。まさに欲求不満と言いますか、何か満ち足りないままに、「やむを得ないが、こんなところか」という形でしか満足が見出せない人生になっている。そういう人間のあり方に対して、根源から「本来に目覚めよ」という呼びかけとして「願」が教えられている。本来、我々にあるのかも知れないが、我々からは絶対に見えない、絶対に体験できないものから呼びかけられ

る。そうした仏の願いというものは、本来、形にならない。「願」というものには、形はない。

我々の願いは、成就したら消える。けれども成就した「願」が本当に力を持つ、これが「如来の願」だと。だから、いわゆる人間の言う願いではない。人間の言葉になっている願は、人間の欲望をあらわすかも知れないが、「如来の願」は欲望ではない。人間は外へ外へと自分の欲望を満たそうとするけれども、人間自身が開かれるということはない。人間の願という言葉、人間の願いの方向というものと、仏教が「願」の言葉で教えようとする人間への呼びかけとは、方向が違うわけです。

人間が人間から発想して対象を見、対象に呼びかけていく表現、そうした表現とは逆に、仏教の言葉は、いつもどこかで人間を目覚めさせようと呼びかけてくる。本来、形がない、本来、言葉ではないものをもって、人間に呼びかける。言葉を使わざるを得ないのだけれど、人間の状況を言いあてる言葉ではなくて、人間を破る言葉。一切の言葉は、人間の対象としてあるわけですが、仏教の言葉は、対象の実体化を破るというのはたらきを言葉に与えようとするのです。

だから、浄土というものが実体的にあって、そこに行ったらたすかるという話ではなくて、浄土として呼びかける「願」のはたらきがあって、そうした「願」のはたらきに触れれば、言うなれば、それがもう浄土だと言ってもよいわけです。しかし、浄土と言ってしまうと、浄土がどこかにある特定空間という意味を持ってしまうから、そうは言わない。そのような浄土と

いう場所があるわけではないのだから。言わなければ、浄土という場所を教えて呼びかけるわけだから、呼びかけてくるものに触れれば、そこは浄土だと言ってもいいのです。そこが言葉というものの難しさですね。

### ■ 大慈大悲と人間の分限

浄土の本質、浄土を生み出す本性というものは大慈悲です。何のために浄土が教えられるのかというと、大慈悲のためだと。人間の慈悲というものは、時にもよし、時にもよさない。あるいは『歎異抄』に言うように、もよおしても、すえとおらない。けれども、それで要らないというわけではない。人間は、それを大切に生きていくしかないわけだけれども、悲しいかな、それだけでは人間は成就しない。そこに大慈悲があるからこそ、人間は人間の分限が見える。大慈悲が教えられなければ、人間は小慈悲でもって自己を正当化する。小慈悲というものは、すえとおらないし、むしろ罪を起こすこともある。自他ともにそれで迷惑していくということもある。たすけられることも勿論あるでしょう。だけど、人間の分限が大悲の前に照らされるということがあって、人間は本当に謙虚になれ、愚かさを知らされるのです。

人間が、自らを正当化していく危険性を破って本来に帰っていくという方向性を、仏教はいつも呼びかける。自分ということになったら、和讃にあるように、「小慈<sup>しょうじ</sup>小悲<sup>しょうひ</sup>もなき身にて有情<sup>うじょうりやく</sup>利益はおもうまじ」(「正像末和讃」)と。

では、現実に親鸞が人をたすけたいと思わなかったのかというと、そういう意味ではないでしょう。そういう意味ではなく、慈悲心というもので本当に生きているかといえば、恥ずかしいけれども、そういうものではない。自我心の方が強いと。衆生をたすけるはたらきは、如来のはたらきだと。本願のはたらきだと。だから自分が救ってやるという話ではない。如来の大慈大悲のみが衆生を救う。如来の大慈悲が自分

に響いて、如来を信ぜよということが自分の中に、「そのとおりだ」と頷ける。だから大慈悲心というのは、自分が大慈悲を生み出す心だという意味ではない。自分の心が能動的に大慈悲だということではないのです。

それは、ある意味の絶対受動です。能動というよりは受動である。それが他力という言葉の誤解される原因にもなるわけです。受動だからお与えだろうと。そうだとすると、何もなくてよく、怠惰を正当化するというだけの話になる。しかしそういう意味ではない。いのちをどういうふうに尽くしていくかというのは、一人ひとりの宿業だろうと思います。縁が与えられる中で、動く心の中で、人は因縁の事実を精一杯生きていくわけですから。だから、何もしないでよいのが他力だとか、そういう誤解をはらわなければならないと思うのです。現在に安住するから、それで終わりなのではない。未来に向かって奮励努力できるのが精神主義だと清沢満之先生はおっしゃる。与えられた因縁のところに全力を尽くして生きていけるのだと。

本当に、一つ間違えば死というものに踏み込んでしまうようないのちだけれども、与えられているいのちのあいだに、この苦悩のいのちを背負って歩めるということ、それが現代という時代の、この闇の時代に大事な一点になるのではないかと思うのです。(文責：センター)

### 「親鸞思想の解明」のご案内

センターでは、皆さまのご要望に応え、本講座を公開で開催することにいたしました。どなたでも聴講(無料)いただけます。問い合わせは、センター(TEL 03-3814-4900)まで。

記

日時：2002年12月25日午後6時30分～9時

2003年 1月28日 同上

2月27日 同上

場所：有楽町・東京国際フォーラムG410(予定)

JR・地下鉄「有楽町」駅より徒歩1分

そうらわばこそ、すかされたてまつりて、という後悔もそうらわめ。いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

①<sup>みだ</sup> 弥陀の本願まことにおわしませば、釈尊の説教、虚言<sup>きよごん</sup>なるべからず。仏説まことにおわしませば、善導<sup>ぜんどう</sup>の御釈<sup>おんしゃく</sup>、虚言<sup>きよごん</sup>したまうべからず。

善導の御釈まことならば、法然のおおせそらごととならんや。法然のおおせまことならば、親鸞<sup>しんらん</sup>がもうすむね、またもつて、むなしかるべからずそうろうか。

詮<sup>せん</sup>ずるところ、愚身<sup>ぐしん</sup>の信心におきてはかくのごとし。このうえは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々<sup>めんめん</sup>の御<sup>おん</sup>はからいなりと云々

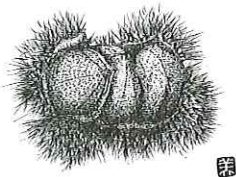
(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)

弥陀の本願が真実<sup>まこと</sup>であるならば、釈尊の教えがフィクションであるはずがない。また、釈尊の教えが真実であるならば、善導の解釈も虚構<sup>きょこう</sup>であろうはずがない。

また、善導の解釈が本当であるならば、法然の言葉が虚しいはずがあるうか。また、法然の言葉が本当であるならば、私(親鸞)がお話する趣旨も、また無内容ではないといえるのではなからうか。要するに、我が信心はこのようなものである。このうえは、念仏を信じようとも、また捨てようとも、あなた方ひとりひとりが決断することである。

## 語 註

①【弥陀の本願まこと】客観的な真理ではなく、衆生<sup>じょうじやう</sup>の価値意識の虚偽性を徹底して批判してくるはたらきを「まこと」という。その「まこと」のはたらきを、釈尊は『大無量寿経』に「弥陀の本願」と表現したのである。



## 『anjali』第4号および

### 『現代と親鸞』第2号を刊行

このたび、情報誌『anjali』(アンジャリ)第4号(写真上)、並びに研究誌『現代と親鸞』第2号(写真下)を刊行しました。

『anjali』第4号では、作家の辺見庸氏、精神神経科医の原田正純氏、哲学者の上田閑照氏など、10名の各専門分野の方々に、現代社会・現代人の諸課題について、ご執筆いただいております。

一方の研究誌『現代と親鸞』第2号は、「現代と親鸞の研究会」から介護士の高城俊郎氏、医師の帯津良一氏、作家の高史明氏の問題提起と質疑。さらには本紙2〜3頁で紹介の連続講座「親鸞思想の解明」(本多弘之所長の問題提起4講座分)を掲載しています。

なお、『現代と親鸞』(創刊号・第2号)ご希望の方は、センターまでご連絡ください。



## 『聖典』の試訳（現代語化）

仏教は、お釈迦様の教え（音声言語）を聞いた弟子たちが経（文字言語）としてまとめた言葉の体系である。お釈迦様が、自ら執筆されたお経はない。ましてテープレコーダーがあったわけではないから、物理的にお釈迦様の言葉が記録されているわけではない。ただ、その教えを聞いて救われた弟子の感動が残されているだけである。「如是我聞」とは、このように教えが聞こえることによって、私は救われましたという確証の記録である。

そう考えてみると、この『歎異抄』という書物は、まさに「如是我聞」の書であることに改めて気づかされるのである。第二条は、親鸞の言葉によって救われた弟子の言葉である。その意味で、まさしく『歎異抄』は「大乘経典」に値する書物であった。

（武田定光）

## 『歎異抄』試訳〈第二条〉その2

## 原文

たとい、法然聖人にすかされ  
まいらせて、念仏して地獄におち  
たりとも、さらに後悔すべからず  
そうろう。

そのゆえは、自余の行もはげ  
みて、仏になるべかりける身が、  
念仏をもうして、地獄にもおちて

## 現代語訳

もしかりに、法然上人にだまされて念仏して地獄に墮ちたとしても、決して後悔はしない。

というのは、念仏以外のさまざまな努力を積みかさねることによって、仏になることのできる身が、念仏という行為で地獄へ墮ちたのならば、「だまされた」という後悔もあるであらう。

本来、どのような努力によっても、仏になることのできない身であるから、どうもがいても地獄は私の必然的な居場所なのである。

## 親鸞仏教センターの動き

（2002・9～11）

## ■2002年

- 9・1 『親鸞仏教センター通信』第3号を発行。
- 9・10 センター刊行物編集会議
- 9・13 親鸞聖人ご命日のつどい
- 9・17 第36回研究会（研究・交流・出版等の実働企画）以降、11回の研究会を開催。
- 第3回英訳「教行信証」研究会
- 第9回「親鸞思想の解明」連続講座（於・千代田区 東京国際フォーラム）
- 9・19 第3回清沢満之研究会
- 9・30 第12回「聖典」の試訳『歎異抄』研究会
- 10・8 第4回英訳「教行信証」研究会
- 10・11 親鸞聖人ご命日のつどい
- 名古屋別院教化センターとの交流会
- 10・18 第4回清沢満之研究会
- 10・20 大谷大学公開セミナーin東京（於・千代田区 東京国際フォーラム）
- 10・25 第13回「聖典」の試訳『歎異抄』研究会
- 第10回「親鸞思想の解明」連続講座（於・千代田区 東京国際フォーラム）
- 11・1 第14回「聖典」の試訳『歎異抄』研究会
- 11・5 第5回清沢満之研究会
- 11・7 第5回英訳「教行信証」研究会
- 11・8 親鸞聖人ご命日のつどい
- 現代と親鸞の研究会⑩「生殖医療といのち」聖路加看護大学助教授・森明子氏（於・中央区 東京新阪急ホテル）
- 11・26 現代と親鸞の研究会⑨「われわれは、いかなる時代を生きているのか」作家・辺見庸氏（於・埼玉県 川越プリンスホテル）
- 11・28 第6回英訳「教行信証」研究会
- 11・29 第15回「聖典」の試訳『歎異抄』研究会
- 第11回「親鸞思想の解明」連続講座（於・千代田区 東京国際フォーラム）
- 12・1 『親鸞仏教センター通信』第4号を発行。

## 現代と親鸞の研究会・第4回

## 現代社会とカルト

精神科医 高橋 紳 吾



高橋 紳 吾 氏

「現代と親鸞の研究会」の第4回目は、5月14日、アルカディア市ヶ谷(千代田区)において、精神科医の高橋紳吾氏を迎え、開催した。人間性が喪失したといわれる現代にあって、さまざまな人々が存在の不安を抱えながら、救いを求めてさまよっている。なぜ人はカルトに魅せられるのか？現代の時代状況とカルトに入信する人たちについて、カルト問題を専門に取り組んでおられる高橋氏に語っていただいた。ここにその一部を紹介する。(本多雅人)

## ■ カルト問題とは何か

「カルト問題とは何か」ということについて、我々はこれを宗教問題とは捉えておりません。しかし、まったく宗教と関係がないかと言えば、そういうことではないので非常に難しいところです。宗教の名をかりて、ある種のテクニックとパワーと詐術さじゆつを使って、カルトのメンバーにし、自由にあやつって、結局、救いを求めて入った人たちを餌食にして、さらなる被害をもたらすというグループを考えています。

カルト問題は、二重の意味での苦しみがあります。餌食にされるという問題だけではありません。詐欺であれば、加害者を裁判にかけることで一旦けりがつくわけですが、カルト問題というのは、カルトから抜け出ても、最初にあった心の問題というのは、まったく解決されないまま残っているという、二分節の問題になっているのです。

## ■ カルトを生む背景

オウムサリン事件もそうですが、最初から悪をなそうと思って入信する人はいません。非常に心優しい人たちが多くて、人を何とか救済したいと思うようになるわけです。もともとは自分の心がつらくて、カルトに惹かれていき、「あなたの役割は、修行をして衆生を救済することだ」と言われると、モチベーションが高まり、非常に熱心にワークをするようになることがあるわけです。

では、どうしてそういうことが起こってくるのかというと、いわゆるマインドコントロールの問題になります。カルトに入る若者たちは特殊ではないだろうか、といった素人論議は数多くあるのですが、実際には特別な人がカルトに入るわけではなく、ややもすれば、我々がオウムの信者になっていたかもしれないような、そんな事情があるのです。

現代の若者たちは、欲しいものは何でも手に入り、生活苦とは無縁です。しかし、物の貧困は消滅しましたが、新たな貧困が心の領域に点滅しているのです。つまり、心の貧困です。それからシステム社会という、一つの歯車になってしまう社会ですので、代替えがきくという意味では、「かけがえのない存在」であるということを経験しづらくなっているということです。そういう「かけがえのなさの喪失」が若者を宗教の方へ向かわせていくのです。

現代の若者が持つ未来のイメージは、決して明るくありません。地球環境破壊、政治不信、個人のレベルでも未来はバラ色とは言えませ

ん。就職しても、稼いだ金を消費するだけの「消費機械」以外の何者でもない、システムの一部でしかないという実存的な危機意識があります。

さらに現代は、自由の獲得と引き換えに、価値観の多様化と言えは聞こえはいいのですが、要は、倫理やビジョンの欠落した、悪しき個人主義的な社会へと地滑りを起こしています。そこには、かつての全共闘世代が選択したような単純な社会変革運動へと向かう凝集力はない。これは何も日本に限らず、先進国の間ではすでに感じられていることですが、「自分は何者だろう」「自分はどこから来てどこへ行くのだろう」という根源的不安を引き受けてくれる社会的な装置がないのです。

### ■ 入信動機とカルトの救済論

入信する個々人は、すばらしい要求をもって入信します。カルト側はそれを利用して、それぞれの要求を満たす「救いという名のエサ」をまいて入信させていくのです。

入信者がもっている要求は四つに大別できますが、それぞれに応じたカルトの救済論があるのです。

まず、「自己変革要求」に対してです。コンプレックスをもった者に対して、カルト側は、悩みが解決できるような治療的・訓戒的メッセージを与えます。二つ目に「自己高揚要求」のある者に対し、人生における有能感を与えて、生きがいや社会的貢献といった人生の目的や意義を説明し、生きていく上で見習うべき価値のあるモデルを提供するなど、自己実現的メッセージを与えます。三つ目に「認識要求」のある者に対して、特に超能力、オカルト、理想的な家庭や世界、歴史の法則性や世界の終末などについて理解したいという動機づけをします。そして、四つ目は「親和要求」です。これが一番多いのですが、親密な仲間集団を求める欲求が満たされていない者に、孤独感をいやし、真に心を開いて語り合う場所と人を提供するのです。

以上のような入信動機パターンからみてとれるのは、若者が自己の葛藤を処理しきれず、ひそかに孤独を感じ、「どう生きるべきか」と呻<sup>しん</sup>吟<sup>ぎん</sup>している姿なわけですから、つまり、生きづらいている若者が片方にあります。それとセットになっているのがカルトの世界観で、これが救済論になってくるのですが、「ビジョンを生きる」「クリアになる」「ステージをあげる」「真の愛」など、若者を惹きつけるキャッチフレーズが用意されています。

そして、問題は「人生を一回きりのものとは考えない」ということです。「前世や過去世での『罪障』や『古い傷』を消滅させたり、クリアにすることによって『真我』や『永遠の魂』に到達し、来世や天国で救済を受ける」と教えるのです。これがないカルトはありません。

すばらしい要求をもって入信したものの、まったくちがう方向に行ってしまう。脱会しても心の問題は残されたままです。こういったカルト問題に対する解決、真の救済に対して、皆さん（真宗）の出番が期待されています。ぜひとも力を貸していただければというふうに思うわけです。（文責：センター）

高橋 紳吾（たかはし しんご） 精神科医  
1952年、広島県生まれ。東邦大学医学部大学院卒業。東邦大学医学部精神神経科医局長を経て、ハイデルベルグ大学精神医学教室に留学され、比較宗教病理を研究。現在は、東邦大学医学部精神神経科助教授、日本脱カルト研究会代表理事。著書に『図解 洗脳撃退マニュアル』（同文新書）『超能力と霊能者』（岩波書店）などがある。また、『a'njali』（親鸞仏教センター）第3号に「若者と宗教」を執筆いただいている。



「現代と親鸞の研究会」（千代田区の「アルカディア市ヶ谷」で）

## 親鸞仏教センター業務の紹介

2002年12月1日現在

親鸞仏教センターは、親鸞聖人の仏道こそ、苦悩する人類に真の解放をもたらすものであることを、現代との対話をとおして探究していこうとする研究交流施設です。現代が抱える危機的状況のなかにあって、親鸞聖人があきらかにされた教法こそ、濁世を生きる人間の闇を破る唯一の指標であることを、あらゆる機会をとおして語りかけてまいりたいと考えています。

以下、センターの柱となる業務内容についてご紹介します。

### ① 研究

現代に向かって親鸞聖人の教えを発信するためには、現代の最先端の問題に関わっておられる方々から現代の課題を学ぶことをとおして、親鸞聖人の訴える人間解放の視点をいただき直すことである。現代に親鸞聖人の願いを伝えるには、どのような言葉で語ればいいのか、新しい表現を探究する。

#### (1) 現代と親鸞の研究会

さまざまな分野で活躍される方々を講師に、「現代とは何か」をテーマに各専門分野での課題とその苦闘を問題提起いただき、時代の課題と親鸞聖人の

思想・信念との接点を探る。

#### (2) 『聖典』の試訳（現代語化）『歎異抄』研究会

現代人がたやすく『聖典』の言葉に親しめるために、まず『歎異抄』の現代語化から試みる。「教えの言葉（原典）」に触れる契機とする。

#### (3) 英訳『教行信証』研究会

鈴木大拙師の英訳『教行信証』を参照しつつ、英訳をとおして『教行信証』の現代的表現を試みる。

#### (4) 清沢満之研究会

現代と親鸞聖人の思想・信念の接点を探るため、清沢満之師の思想の現代的意味を究明する。

### ② 交流

宗門内外の有識者、学術研究及び教育諸機関など、思想的分野や実践的分野などで、今日当面する課題を担っておられる研究者や専門家等との交流をとおして、人類が救われる真の言葉を探究する。親鸞思想に依って立つ社会に向けたネットワーク化をはかる。

#### (1) 連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞聖人の「非僧非俗」の人生態度を、現代社会

の大切な思想として掘り起こすべく、親鸞思想を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして連続講座を公開で行う。

#### (2) 親鸞思想の解明懇談会

「親鸞思想の解明」と連動した有識者との懇談会。親鸞思想に依って立つ真に開かれた社会をめざして、専門分野の識者相互の交流と拡大、並びにセンター活動への助言をいただくための交流懇談会を開催する。

### ③ 出版

親鸞思想に依って立つ社会をめざすために、情報誌『an'jali』、研究誌『現代と親鸞』、機関紙『親鸞仏教センター通信』を継続発行する。現代の諸問題と人間の抱える課題の共有を願って、センターの研究成果や講演内容を広く公開する。

#### (1) 情報誌『an'jali』（年2回刊行）

経済、思想、教育など、各専門分野で活躍される

方々に現代の課題とその苦闘を執筆いただき、21世紀の確かな時代の方向を探る情報誌。

#### (2) 研究誌『現代と親鸞』（年2回刊行）

「現代と親鸞の研究会」をはじめ、「親鸞思想の解明」や研究員論文等を掲載し、研究成果を広く世に問う研究誌。

#### (3) 機関紙『親鸞仏教センター通信』（年4回刊行）

研究会や交流活動など、センターの動きを広く紹介する機関紙。

## あ と が き

学事施設としての性格を有するセンターの特色は、他の当派内の学事施設とは異なり、首都・東京に置かれた意味が何よりも大きい。つまり、東京はあらゆる面で社会をリードする時代の最先端の場であり、かつ諸問題の噴出する場でもあるが故に、そこで学ぶということは、「時代文明の与えてくる魅力を学ぶというよりは、文明に付随して人間を巻き込んでゆく深い闇を明らかに自覚していく」（『現代と親鸞』創刊号「巻頭言」）ことではないか。「闇の自覚」は諸課題の核心にふれ、自ずと親鸞思想に依って現代を解き明かすことにつながると考えるからである▼多くの読者からお手紙を頂戴した。ここに一部を紹介する。「深淵な『現代の病理』と対面しながら、親鸞仏教の信念・信心によってどのように生きればよいのか、その具体的な実践・生活のあり方を授けられることを人びとは待望している時代だと痛感しており

ます」（神戸市・中村了権氏）。「理性を抛り所としながら、それを越えたものへの希求が、世代を越えて、日本の社会に拡まってきていると思われ、センターの役割の貴重さをあらためて思う次第です」（渋谷区・國府田隆夫氏）。「ご心労のとおり、日本の仏教は『重い病』に侵されている日本人に、治療のための妙薬を取り出せない現状におかれていると思います。『何かに呼びかけ、叫びかけてくださる』お方があって、初めて『病』の深刻さを知ることになり、仏教の活性化が引き起こされる動機づくりが促進されることになると思います」（千葉県・楠正弘氏）▼あらためて、この現実に立ち上ることのできる信念を、時代の言葉で紡ぎ出していかねばならない使命を痛感する。そして、必ずや親鸞思想が現代を支える思想として掘り起こされるであろうことを願ってやまない。皆さまのご意見、ご感想をお待ちしています。（長谷岡）